

福岡気功の会 会報「ゆーき」  
アーカイブス 8

# 気功的雑学

## CONTENTS

- |   |             |           |
|---|-------------|-----------|
| 1 | あぶない精神世界の窓際 | 54-970118 |
| 4 | こまたとはどこのことか | 68-990331 |
| 7 | 篠原選手の敗北     | 77-001015 |

# あぶない精神世界の窓際

すいません、読んでもらいたいというわけでもないのに、わざと読みにくい細かい字で書かせてもらいました。

山部 嘉彦

## 一 買ってしまった『週刊文春』

週刊誌は、電車の中吊り広告を読んでしまえば実際に読むより分かってしまうものなのだが、きわめて稀に、お金を出して買ってしまうことがある。『週刊文春』1月2日9日新年特大号は、トップ記事が徹底追及第一弾『脳内革命』で500万人を騙した春山茂雄の大罪というヤツで、これはちょっとタイトルだけでは分からない。まえに、会報で紹介したこともあるので、粗悪品を紹介してしまっているのだったら謝らないかん、と買って読んだ。この記事がホントなら、春山はその与えられた支持や賞賛の90%（ちょっと厳しいか）は差し引かれなくてはいけない。でも、間違ったことを書いてはいるが、悪いことを書いてはいるわけではないので10は残る。50万人分、てどこか。

この記事がどんな主張をしているか、骨子の部分をそのまま切り抜いて下に掲げる。

まず『脳内革命』の要約。

一、人間の意識活動にともな  
って、脳内ホルモンが分泌さ  
れる。その場合、ブラス発想  
をすると身体に有益な脳内モ  
ルヒネであるβ-エンドルフ  
インが分泌されて、自然治癒  
力が高まり、健康と長寿をも  
たらす。逆に、マイナス発想  
だと有害な猛毒のアドレナリ  
ン、ノルアドレナリンが出て  
病気になる、老化も早まる。  
二、脳内ホルヒネはほとんど  
出してかまわない。そのため  
には日常においては「罪の意  
識を感じないように」して、  
欲求を追求し、快感を得るよ  
うにするとよい。

春山氏は「脳内ホルヒネの  
存在は以前から知られていま  
したが、鎮痛効果以外とした  
る意味もないと考えられ、長  
い間注目されませんでした。  
ところが最近研究が進んで、  
すごい効力を秘めていること  
がわかったのです」と書く。

三、もともとこうしたこと  
は東洋医学ではわかっていたこ  
とであり、そのためのハウツ  
ーもあるが、現在のやっとな  
西洋医学でもそれが科学的に証明  
されるようになった。

つぎにその反論。

まず第一番目のポイント。  
ほとんどすべての専門家が口  
をそろえて断言することだ  
が、実は、脳内の微量な化学  
物質を定量する方法は、いま  
だに確立されていないのであ  
る。つまり、春山氏の「理  
論」なるものは、量れない物  
質の増減を基礎として組み立  
てられているのだから、そも  
そも最初の出発点から何の根  
拠もない、というわけだ。

『脳内麻薬  
の真実』の著者である高田明  
和・浜松医大教授はこう語る。  
「昔は鬱病や幸福感とエンド  
ルフィンとの関係が注目され  
た時期もありましたが、現在  
はその他に、アメリカで二千  
万人が服用しているという抗  
鬱剤の元になるセロトニンな  
ど、別の脳内物質が発見され  
て、そちらに関心は移ってい  
ます。エンドルフィンには鎮  
痛作用が認められている程度  
で、さまざまな病気が治るな  
んてことはない。もちろん、  
『脳内革命』の内容は全部ウ  
ソ。これが本当ですなんて生  
理学者が世界に一人でもいた  
ら、私は教授を辞めます」

ふーん、そう。だからどうだっというの？ といいたくなるのだが、批判者は「だから許せん」となる。ウソ  
ッパチを書いて人々を煽り立てているから許せんのかな、と思うが、多分、そうではなくて、こんなウソッパチ  
が500万部も売れちゃって大評判をとってるのが許せんのだろう。春山も許せんが、春山を支持して（本を買  
って読んで納得しちゃって）る読者が許せん。第2弾がこれまた150万部も売れちゃってるのがまた許せん。

批判は翌週、春山ってこんな奴・・という人格攻撃に転ずる。週刊誌なんだなあ。でも、春山の東洋医学免許皆  
伝という詐称は悲しい。なにもかにもごたまぜにして練功歴20年だなんて言っちゃう気功指導者と同じくらい悲  
しい。

この手の批判は半分はヤッカミなのだが、矢面に立たされている人物や作品の決定的な弱みを突いていること

もまた事実であることが多い。その弱みとは「精神世界」と「精神力」に対する過信である。春山は、もちろん精神世界の住人ではないが、その特徴を備えている。

例えば、オーラだって、私は見えたって見なかったことにしようと思うぐらい懐疑的でありたいといつも思っている。いい？ 懐疑的であって、否定的じゃないよ。

ついでに書いておくと、『脳内革命』はいい本だ。批判記事を書いた岩上安身の言い分を丸飲みしてからでさえ、それなりにいい本だ、と断言する。この本の目次や各章末の要約は、ちょうど電車の中吊り広告のようなものだが、非常に示唆的で、有益である。目新しい内容はあまりないが。

### — 私の本棚における精神世界本

私の頭はマルチではあるが、本棚の本のジャンルの偏りは並みじゃない。もちろん精神世界本も結構ある。しかし、その中から3冊選べと言われたら、

いっけい 桂秀実 中沢新一『それでも心を癒したい人のための精神世界ブックガイド』太田出版 1995

パンタ笛吹・真弓香『アガステアの葉の秘密』1995

Hユウム・Sヨコヤ・Kシミズ『神々の指紋の超真相』1996

を挙げる。多少悪趣味だが、揃って精神世界本の批判本である。

『それでも…』は、オウム以降も一向に衰えない精神世界指向に一矢むくゆべしと書かれたもので、3人の座談が非常に面白い。

『秘密』は、『アガステアの葉』を書いたあの青山圭秀のストーリーは全部ベテンにひっかかった間抜けの誇大妄想、と暴露してしまった本。著者のふたりの愉快なコンビネーションが特上モノ。

『超真相』も『神々の指紋』を書いたハンコックって奴が恥ずべき俗物であることを暴露した本。これには参った。奴は真のイカサマ野郎だ。私はこの本を評判になる前に（初版本を）買って読んですっかりその気になって興奮してしまった分『超真相』を読んで知ったイカサマを前にむかつきが強かった。

前述の『脳内革命』を含めてもいいのだが、どうしてこう、精神世界にはガセネタが多いんだ？ 私はこの現実の社会が病んでいるのと同じように、あるいはそれ以上に精神世界もその住人も病んでいるとしか考えられないのだ。

まえに、『ミュタント・メッセージ』が白人女のデタラメのでっちあげだと当のアボリジニが告発しているという話を紹介した。このベストセラーになった本を片手に、欧米各地を講演旅行を続けているという白人女の破廉恥と強欲は許せるだろうか。要するにここのだ。内容はでたらめでも言っていることが良ければいいじゃないか、というゆるふん(ゆるい)態度を「寛大な」とか「肯定的解釈」とみなす風潮が精神世界には濃厚にある。『脳内革命』に噛みついた週刊文春の記事にも内容はでたらめだけと言っていることが良ければいいじゃないか、で済まず態度があるわけだ。私は10%ぐらいは斟酌してやってもいい、でもでたらめやこじつけやうそはいかん、いい本なのに惜しいな、というところだ。10%救うのは人を傷つけたり犠牲を強いていないからである。断っておくが、私が読み手として勝手に救っているだけの話で、私が春山なら直ちに絶版にして謹慎するね。穴があったら入るよ。書き手として10%ぐらいは認めてくれ、とは言えない話なのだ。『ミュタント・メッセージ』のほうはアボリジニが断固抗議している。自分たちの存在と文化を歪曲し、誇りを傷つけている、この白人女はメッセンジャーを装って稼ぎ回っている、でたらめを撒き散らしながら、と。だから救いようがない。

私は気功家として、精神世界と無縁ではない。精神世界のUFO、超科学、超古代史、大予言、過去世、来世輪廻転生などのテーマは避けて通ることはできない。この世界、というより業界の常識ぐらいは知っておきたいし、興味のあることは深く知りたい。だから本棚にこの手の本は並んでいる。しかし、のめり込んではいない。自分で言うのも何だけど、慎重です。

### — トンデモ本という批判精神

上に紹介した『超真相』の筆致と『トンデモ本の世界』『トンデモ本の逆襲』（いずれも洋泉社刊）は共通している。いっしょくたにするとクレームがつくかもしれないが、彼らがいわゆる精神世界とその住人に対してクールに構えてくれていること自体は非常にありがたいことだと言わねばならない。

さてトンデモ本とは何か。著者は大真面目だがその内容はトンデモなく…おかしかったりぶざまだったりピンボケだったりした本のこと。これが定義で、さまざまな分野に見られるが、中でも精神世界がらみのUFO、超科学、超古代史、大予言、過去世、来世、輪廻転生などをテーマにした本にひじょーに多い。もちろん、気功、というより「気」がらみのトンデモ本も少なくない。

どうして多いのかというと、出版業界の中ではこの分野の需給バランスが悪いからだと思う。読む人が多いのに書く人が少ない。で、書くだけの力のない人が書くために起こる。きょうびの読者はお金持ちだから、2千円ぐらいだったら興味しないで買っちゃう。低俗なマンガ週刊誌を買うのと同じ。昨夏、久し振りに定方先生にお

会いたとき、話の分かる人に逢った安心感から「気功やってる奴って常識がないから…」とこぼしたら、「ほら、そんなこというから敬遠されちゃうんだよ」と注意された。そうだよな、と思いながら私は安っぽく受け売りすることに何の咎め立てもない業界に苛立つ。科学の常識、論理の常識、思想の常識というものがある。それから逸脱するときはその旨断るぐらいの仁義がほしい。春山も、青山も、ハンコックも、マルロ・モーガンも、そこんところが甘い。まじめにコツコツ研究してきた学者に糞飯モノだ！と批判されるようなのは、まあ人間のクズと言っておくと思う。

『トンデモ…』を企画している連中は、自ら『と学会』と名乗っているのだが、こんな「大ボケや無知、勘違い、妄想などにより、常識とはかけ離れたおかしな内容になってしまった本」が幅を効かせているのを苦々しく感じていたらしい。はじめは常識ある人間から見ると、思わず吹き出してしまうような非常識のため、仲間うちで笑っていたところ、活字とか肩書というものは恐ろしいもので、非常識が通ってしまっているらしい、と気づいてこりゃ、思わず吹き出してしまう人々と交信しよう！ということになったらしいのである。

「気功やってる奴って常識がないから…」と言って退けた私の常識も実は情けないほど貧弱で、この2冊の『と本』の助けがなかったら、ハマってしまったにちがいない本も何冊かはあったのである。その意味で〔と学会〕には敬意を表するのだが、批判の文章を読んで、これは的外れだなあ、著者の言いたいことを受け取れずに揚げ足取りに埋没しちゃってるなあ、科学の限界臨界に対する自覚がないなあ、と感じることも少なくなかった。それで『と本』は「この3冊」には入れなかったのである。

いわゆる精神世界の人々は、受入れじょうずの批判知らずで、世間知らずに違いはないのだが、近代市民社会が要求する自我ないし自尊心が欠落しているんだろうな、と思うことが多い。科学的常識があるかないか以前の問題じゃないだろうか。

#### — それでも心を癒したいか

気功をする人の中には、精神世界に興味を持っていたり、ハマったりしている人もいると思う。私もその一人である。ちょっと違うのは、私は受入れ下手で批判がましく、しっかり自尊心を持っていることである。いいことだとは思っていないが、安っぽい新説や宗教にかぶれない自信がある。この小文を読む人もかぶれないで欲しいと思って「この3冊」を紹介した。

『アガステアの葉』『神々の指紋』を読んで納得してしまった人は、当該2冊を必ず読むこと。読んでもう一度自分の考えを整理することをお勧めする。

2年前の1995年、オウム事件が起きた。この事件はアタマのされるとおぼしき有名大学出の若者が、人相はとびきり悪く、小心者特有の声をもち、ソフトボールで遊べる巨漢の盲人の予言に参ってしまっただけで非道な殺人を犯すという、一見わけのわからぬ事件で、今の今まで尾を引いていることはご存知のとおり。事件が発覚した直後は、ヨーガはもちろん気功も影響を受けて、敬遠されたものだが、精神世界のトータル需要は一向に衰える気配なく、俗界の常識インテリは首を傾げて『それでも心を癒したい』んだったら、こんな本を読んでごらん、でもね、それと、せーしんせかいってこーゆーんじゃないかな、という解説を付して一冊、世に問うた。それが『それでも心を癒したい人のための精神世界ガイドブック』である。中沢新一はけして俗界の常識インテリなんかではないが、企画の志向はそんな所だろうと思う。

中沢が一枚噛んだお蔭で、選ばれた本は上質で秀逸なものかほとんどである。麻原のものが4冊も入っているという、いかにも発起の動機を物語るハズレを除けば、解説もよい。品がある。

そういう訳で、例の2冊を読んでない人は、こちらを読まれることをお勧めする。きつと紹介されている本の中に読んでみようと思う本があるはず。

#### — わが津村は脳軟化イヒ？！

こいつはあくまでオマケだが、『それでも…』の第1章の座談会で、中沢と桂(すが)が、津村喬の志向性についての確に語っている。中沢が津村の根っこを毛沢東のエコロジスト的側面に求めてソフトレボリューションの方の人じゃないでしょうか、と言っているのが面白い。桂は思想をネグって政治に流れていった奴に恨みでもあるのか「津村喬が典型ですが、エコロジストは脳軟化になっていくわけです」と言う。思想のポテンシャルのことを論じている中でのかけあいで、意味深長である。

桂は根こそぎ全共闘みたいなガチンコとおぼしく、私の友人でもある武田崇元を引き合いに出して、津村のように毛沢東に行かない奴も精神世界で泳いでるってのはどうゆうことだ、と吠えている。いや、私の友人に呉智英がいるよ、彼は今や押しも押されもしない封建主義者だぞ、と教えてやりたい。そういう私は毛沢東でもエコロジストでもないが、脳軟化だなあ。ただし、思想のポテンシャルは落ちてないつもりである。そうそう、もう一人、毛沢東でもエコロジストでもない奴で、脳軟化にも陥らず、思想のポテンシャルも落ちていない、私の友人河村悟という詩人がいるよ…でも教えてやんない。私の友人は切れる。私は切れそうである。Ω

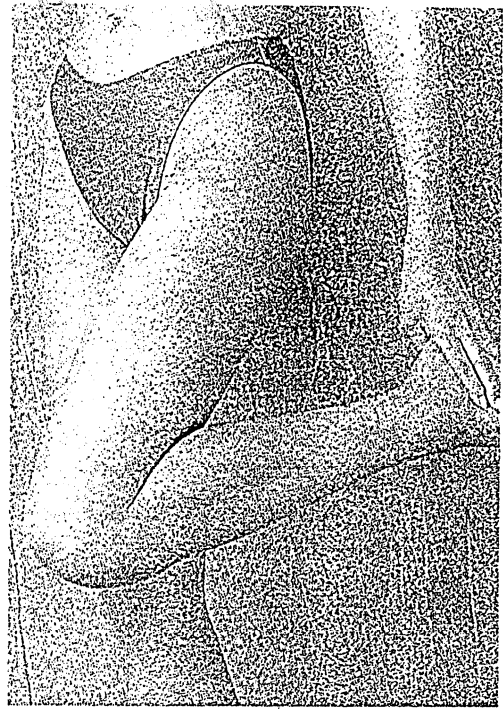
# こまた

とはどこのことか

站椿の要諦は、腰の構えにある。命門を弛め、そのゆるみを外側に開き、腰を巡って鼠蹊部に流し込み、さらに脚の内側を膝まで伝える。股関節の大転子から膝の内側までは、ちょうどそこを両端とする細長い縫工筋という筋肉があり、その内側に沿って流し込むようにする。

鼠蹊部がいちばん弛んだ感じになるので、これを「鼠蹊部をひそめる」と形容することにした。ということはすでに前号に書いた。書いたがちょっと決まらない。

ひそめるっていうのはいいけど、鼠蹊部というのがヤボったい。何か、粋な昔からの呼び方がないのかな。例えば腕(うで)を「かいな」首筋を「うなじ」膝の裏を「ひかがみ」というような。ありそうなんだけどな…



と、考えるともなく考え始めてしばらくたったある日のこと。ふと「小股の切れ上がったいい女」というのは、この鼠蹊部の角度が立っている——ということじゃないかな、と思いついた。思い着いたのではなくて、思い到ったのかも知れない。ただの思いつきなら以下ことばの遊び。思い到りであれば議論百出の《小股論争》に一石を投ずる珍論ということになる。

もし、小股が鼠蹊部を意味するなら、どうして切れ上がっていい女なのかという素朴な疑問に誰もが納得する答えを用意できなければならない。男が納得すればいい問題かも知れないけど…。いずれにしても与太話として軽く読み流してほしい。

小股がどこか。どんな意味か。まず、国語辞典を引いてみよう。

「(1)股の開きが狭いこと→大股 (2)歩幅が狭いこと」これは共通している。広辞苑と学研の新世紀大辞典はご丁寧に「股のこと」の一項目がある。小股=股だって!? 情けない。そしてもう一つの共通項は例文に「小股の切れ上がったいい女」が載っていて異口同音に「若い女の小粋ですらりとした姿態」とある。意味はそうだけど、どうしてそう言うのかが知りたいのに…これじゃね。とにかく、小学館も三省堂も学研も岩波も軒並みダメだということは分かった。

議論百出と書いた。分からないから、諸説噴出するわけである。女が髪を上げてうなじを覗かせている様子だとか、女の股そのものだとか、どれもこれも、女の色気と関係があることだけは間違いないが、説明不足は否めない。そういう意味では、私にも出番があっていいわけである。多分、鼠蹊部のことだとする説はあると思う。しかし、説明はないか不足だろうと勝手に想像して、いよいよ自説を展開することにしよう。

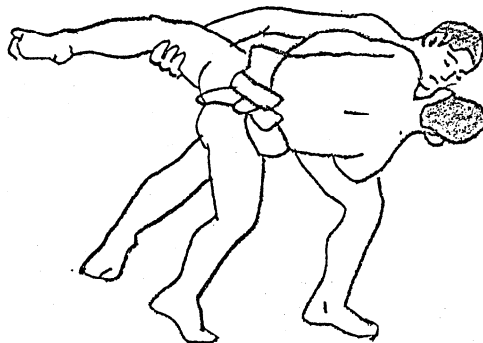
まず、股=小股というのは、これはない。だいたい、モノがあって、小モノがあるのである。身体に関することでは、例「鼻-小鼻」「皺-小皺」。形のないものは、コトがあって、大コト小コトがあるようだ。小コトしかないものも、もちろんある。「ちんまり」「賢(か)しい」「綺麗」など。しかしどれとして小がついて元の意味と同じなんていうのはない。心持ち可愛らしくなるか、貧弱~下劣になるか、である。

もし、小鼻が小さい鼻ではなく、鼻とは別の、鼻の近くにあってそれに似たそれよりは小さいものであるところの鼻翼を意味するように、小股と命名されたのなら、それは、股の近くにあってそれに似たそれよりは小さいものであるに決まっており、うなじでないことは明らかである。

じゃ、小脇ってえのはどうだ? 小脇に抱(か)える、という小脇。国語辞典は、またざわめく。一定してい

ないのだ。小脇の小は、ちょっとという意味だと某辞典。だとすると副詞的用法ということになる。じゃ手と小手ならどうだ？ はっきり言って、これらの国語辞典を編纂した国語学者はそうそうたる面々だが、殆ど例外なく、身体思想がなきにひとしい。考えたこともないのだろう。

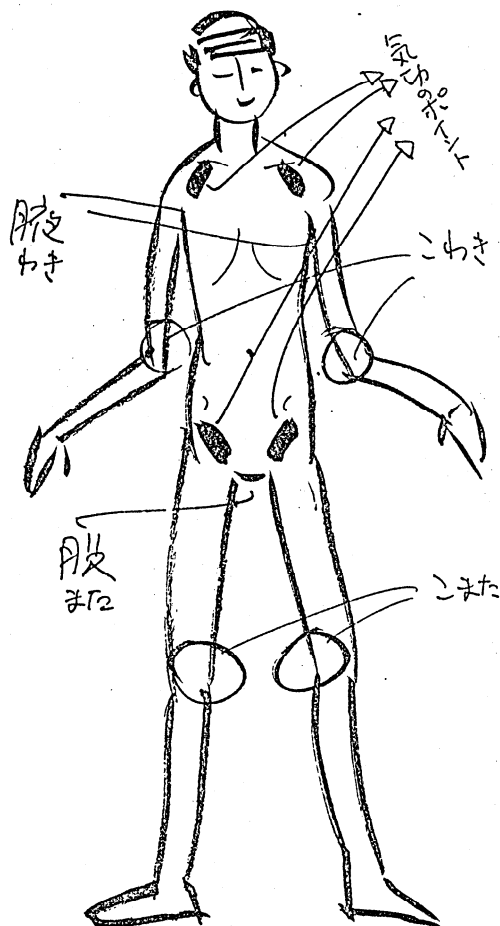
それはさておき、小脇は、小脇に違いない。小脇に抱えるとは、肘を折ってその内側ないし上腕の下の方と体側面とで物を挟んで保つ(手持つ)ことじゃないか。すると、小脇も見えてくる。脇があって小脇があるのだ。両者は体幹からの分岐点であり、用語が完璧に対応していることにお気づきだろうか。



相撲の決まり手に、こまたすくいがある。小脇掬いだ。相手の小脇を手の平で掬い上げてバランスを崩し、手前に引きぎみに横倒しにする技である。その小脇とは、膝の内側ないし太ももの下内側。内ももの中程のところを同側の手の甲で撥ね上げて倒す技は内無双というので、こまたすくいの小脇は膝の内側と限定してよい。わき-こわき、また-こまた。肢根のひとつ下の関節の内側である。

それはそれでいいが、じゃ、小脇が切れ上がっているというのはどういうことか。膝の内側が切れ上がっている？ 膝の内側は、老若男女の別なく股まで裂けている、というかはじめから二股になっている。わざわざ若い女だけ切れ上がっているなどと形容を変える必要はない。この形容矛盾は、この言い回しにおける小脇は膝の内側ではないことを示唆しているとみるべきではないだろうか。

しかし、この表現は、小脇が膝の内側であるという当時の「常識」を十分承知の上で、それを逆手にとって作られたに違いないと私は想像たくましくしてみる。



私の推理推論はこうだ。

だいたい、こんな言い方は、江戸時代の軽薄な町人文化の所産である。第一、いい女という意味は如何。これは慎ましい女の類ではない。洒脱、垢抜けている、きっぷのよい、洒落た、そして多分に色気のある女で、しかも男好きのする女であろう。男好きの女ではない。

ところで昔は今と違って、小脇がどこであろうと、女は人前でそこを剥き出しにしたりはしなかった。だから切れ上がっているかどうかは、外見では分からなかったに違いないのである。にもかかわらず、こんな言い方が根強く生き残ってきたのは、いい女と評判の女または外見小粋な女は「小脇」が切上がっていてほしいと男が願うからである。

では、今の男のように、昔の男も小脇がどこだか分からないくせに「あの女は小脇の切れ上がったいい女だよ」と言ったのだろうか。分からないのに言った奴と、分かっている、同じく分かっている奴に「あの女の小脇は切れ上がったぜ」と耳打ちした奴がいたのだろうと思う。その小脇は、世間に言われている常識としての膝の内側ではなく、鼠蹊部だったに違いないと私は睨んでいる。膝の内側だって、昔は女の膝の内側なんて、めったに拝めなかったから、そんな言い方は十分卑猥で官能的だった。しかし、前述したように、膝の内側だと「切れ上がっている」という形容は意味をなさない。

だから「切れ上がっている」という形容が、なるほどどうなづける場所こそが、もう一つの小股なのだ。それを、今、鼠蹊部として、この形容にふさわしいかどうか検討してみよう。

鼠蹊部が切れ上がっているとは、股間から靭帯が伸びる角度が要するに、ハイレグカットだということである。じゃ、どうしてそれがいい女か。もちろん、そういう下腹、腰の女が見た目にもいい女であってほしいが、果たしてそう問屋が卸してくれるか。いやいや、目が眩むとはこのことである。いい女とは、今も昔も見た目、見かけでは決まらない。少なくとも、仕種、受け答え、器量について並み以上でなくてははいけない…だろうか。

そうではなくて、江戸の遊び人が、鼠蹊部の角度が高い女は遊び甲斐があるという法則を見つけて、符牒、として仲間うちで使っているうちに、知ったかぶりを振る連中を介して外に広がって行っちゃったのである、多分。だから、遊び人に成り代わって遊び甲斐がある理由を述べることにしよう。それは、

- (1)左右の上前腸骨棘と恥骨が作る三角形の面から腹が突き出していない
- (2)腰椎に弾力と柔軟性があり、骨盤の開閉がスムーズである
- (3)股関節大転子が内回してふとももの前側の峰が内側に寄っている＝縫工筋が締まっている
- (4)足の親指にキチンと力が入ることを意味する。

(1)は腰が前に出ている＝腹筋が伸びている、弛んでいるということである。内臓の位置関係が正常で安定している。つまり、健康体確率は高い。

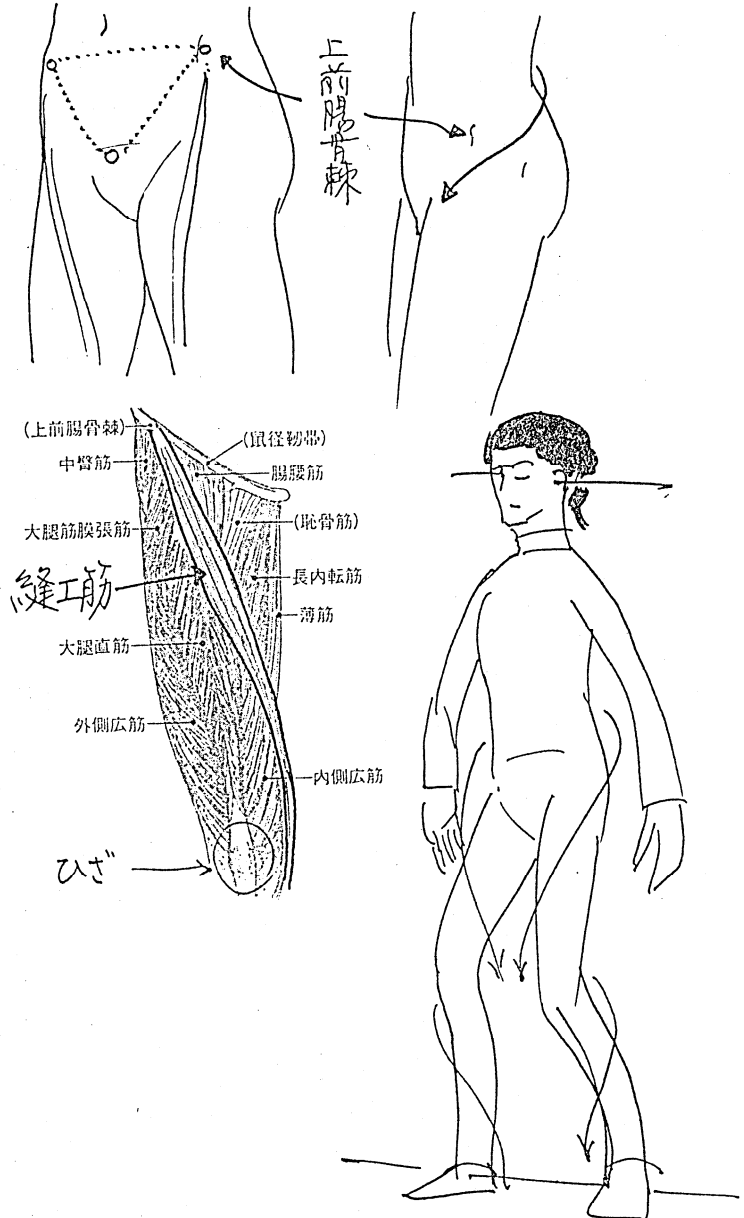
(2)の骨盤の開閉がスムーズであるなら排泄機能が良い。大小便、月経のキレが良い。だから皮膚の艶が良くて体調はいつも良好である。

(3)の縫工筋が締まっている、というのは、乗馬で馬の横腹を膝で締める脚の力の源泉である。当然肛門は締まる。

(4)これは持久力と関係がある。精神的にも肉体的にも。

これ以上の説明は、気功の会の会報では蛇足となるだろうから、切れ上がる、じゃなくて切り上げることにしよう。気功の、站樁の腰の構えにおける「鼠蹊部をひそめる」要領は、上述のように、実は老若男女の別なく、健康の鍵であることが分かる。もう遅すぎる人もいるかも知れないが、小股を切り上げて、いい女になるベーシックレッスンとして、站樁功を見直すというのはどうだろう。私はいい女になるのに、遅すぎる時はないと思う。男のためにいい女になるのではなく、自分のためだからだ。

鼠蹊部と同様に重要な場所が、腕の付け根—鎖骨の外側下辺から腋までの溝—にある。ここが弛むと腕に気が通る。肺経の募穴中府があるところ。こちらの方は、小脇論のまきおこる余地はない。しかし、気功においては鼠蹊部に匹敵する練功のポイントである。稿をあらためて、まとめてみることにしよう。 ■



# 篠原選手の敗北

(や)

シドニーオリンピックの柔道130kg超級決勝戦の実況放送の解説者の狼狽には考えさせられた。

主審を含む2人の審判はドゥイエの内股で篠原が倒されると見て有効ポイントをドゥイエに与えた。残る1人の審判は篠原一本と見た。多数決である。そんなバカな。解説者は、篠原の内股透かしが決まって一本と思ったが、審判が有効としたのだと思いついて、ポイントがドゥイエに付いているのに気づいて「表示が間違ってますよ、これは修正されないと大変なことになりますよ」と危惧していた。表示係のミスだと思っていたのだ。

世界の山下(監督)はもちろん篠原一本と見たが「あの技を篠原有効と見ることはできない、篠原がかけた技と認識するなら例外なく一本だから、有効の表示は取りも直さず審判がドゥイエの技に対するものだとすぐ分かった」ので試合直後から猛抗議した。したけれど、なりふり構った抗議にすぎなかった。あんな抗議じゃびっくりこないよ。

今や「世界のスポーツ」になってしまった柔道は、さまざまな局面で日本人の出る幕がなくなってしまっている。なにせ、青い柔道着の時代だから。柔道がどんどんその精神を失っていく長いプロセスの途上で「それじゃもう柔道とは言えない」と啖呵を切って国際柔道連盟から手を引く機会は何度もあったはずである。しかし、いかなる理由があったか知らないが、日本柔道は譲りに譲り、妥協に妥協を重ね、三船十段が見たら卒倒してしまうものになってしまっている。

柔よく剛を制すから柔道、攻めより受け、後の先。要するに、元は待ちの武術なのである。しかし今日のポイント制の試合では、攻めて攻めて攻めまくっていないと反則を取られてしまうのだ。

しかし、篠原の敗北は、そういう問題ではない。

解説者はもちろん審判の誤審に憤慨していたが、こうも言った。「ドゥイエも、こんな勝ちじゃ気持ち良くないでしょうね」と。ドゥイエ自身、完璧に投げられて(自分の投げが透かされて)負けたという自覚があるだろうから金メダルを貰うのに抵抗があるだろう、勝利と言われてもすなおに喜ばまい、というのである。あれだけはっきり背中から落ちたんだから。私も、そう思った。私だけじゃあるまい、この試合を見ていた殆どの日本人は、そう思ったに違いない。

しかし、ドゥイエは違った。フランス国民も大多数は違った。審判に従うのはスポーツマンの義務であり、鉄則だ。それに意義を唱える日本人はスポーツマンシップに反する。審判が自分を勝利者とした。だからメダルを返上するなんてトンでもない、馬鹿げている。と。

日本人にとって、今も昔も正直は美德中の美德である。悪いことをしても、それを恥じて謝ったらエライのである。被害者が犯人がわからない状況で、正直に自分が犯人であることを申告すれば、それは美談なのである。

今でも、取り調べの鬼刑事は容疑者にこう言って自白を迫っていることだろう。「正直に言ってしまうって。その方がスッキリする。な、正直に言えば刑も軽くなるんだし、そうやって嘘ついてたら後悔するぞ。黙ってるなんて、そりゃ、卑怯だぞ。卑怯者って言われたいのか、え?」と。そんな説教で落ちるわけがないから、当然拷問で裏打ちする。それが戦前戦中の警察の常套手段だった。拷問による自白強要は戦後もしばらく幅を利かせていたが、だんだん証拠物件優位になってきたという話だ。だからと言って、容疑者に対して「容疑者はあくまで容疑者であるから身柄は無実無罪として扱われる。それゆえ弁護士を選任する権利があり、取り調べにおいて、仮に事実であっても自分に不利なことを言わない権利がある。それは不利なことが当局、つまりワレワレのこただが、に利用されて相応な罰を与える妨げになる可能性があるからだ」などと絶対言わない。要するに人権ってものが分かってないのだ。人権思想は、無実を誤解によって断罪してしまった後味に懲りたヨーロッパの苦く悔いの残る歴史の繰り返しの果ての必然である。その昔はヨーロッパも、正直は美德だったのである。

それに、地続きの大地に無数の異邦人が割拠し、しばしばトラブルをおこし、これまたしばしば戦争を体験し、しかもその外側から更なる異邦人に襲撃された歴史を持つヨーロッパでは、交渉術を互いに磨く必要があった。和平交渉を有利に導く才能と妥協する必要を認識する知性のことである。近代スポーツは健康のためなんかでは全然ない。戦争の代償そのものである。和平交渉の結果はたいていは双方に不満の残るものである。納得できないものを納得しなければ、さらなる犠牲を覚悟してまた戦争をするしかない。もうそれはできないから和平交渉に臨んだのだから自己矛盾に陥って自家中毒で苦しまないうちに、納得してしまわなければいけない。ルールに従うとは、煎じ詰めればそういうことである。

日本人にはそこが分からない。そういう経験がないのだから、分からないのは当然である。和平交渉ではいつも、負ける。勝った試しがない。世界の山下も、所詮は日本の山下にすぎず、びっくりかえす奥の手はなかったのである。

さて、オリンピックも終わって落ちついた今になって、この事件を振り返ってみると、どうなれば最善の解決といえるだろうかという問題が残っているだけである。

たぶん、その大部分は心の問題である。勝負は時の運である。もし、立場が全く逆だったら、本人はさておき、ギャラリーにすぎない私たちは、どう反応しただろうか。「あれは篠原の完全な負けだよ。下手な審判が篠原有効をつけたが、あれで金メダルもらっても周りは納得しないだろうさ。金を返上しなけりゃ男じゃないね」となるだろうか。もちろん、そういう人もいだろう。しかし、そういう人よりは、「ラッキー。審判も人間だ、分からないこともあるよ。2人とも分からなかったんだから、きわどい勝負だったことは間違いない。総合力で篠原の勝ちってことだよ。この際、審判には従わなくっちゃね。スポーツなんだから。日本人なら深く返上しろだなんて、フランス人はどうかしてるよ」と言う人のほうが多いような気がする。第一、オリンピックの金メダルの価値は、もうとっくに落ちてしまっている。結局は、「あれは世紀の誤審だったなあ。篠原は気の毒だったが、人生、そういうこともあるよ。な。」ということになるのではないだろうか。

世界の山下は「結果は受け入れざるをえない。だが篠原の名譽にかけて、あれはどっちが投げたのかだけははっきりさせる」と言っているそうである。日本柔道界(だけ)は、気の毒では収まらないのである。

この「名勝負大誤審」はときどき人々の口の端にのぼることだろう。しかし、本質的な思索には発展しそうにない。勝った、と確信してガッツポーズをとった篠原が、その後の試合展開の中で、気を取り直せず、もう一本とるところか逆に内股を透かされてホントの有効をとられちゃったこと。銀メダルを喜ばず、表彰台で終始俯いていたこと。篠原は「弱いから負けたんです」と言った。心が弱いから、と私には聞こえた。心も強くしなさい。真の王者になりたいのなら。…あなたなら、どうする? 結果を無視したり、忘れることは比較的簡単である。恨みを晴らすことに向かうのも、よい。心を整理するのは、むずかしい。